

指標名: 65歳以上の入院患者の転倒・転落発生率

背景

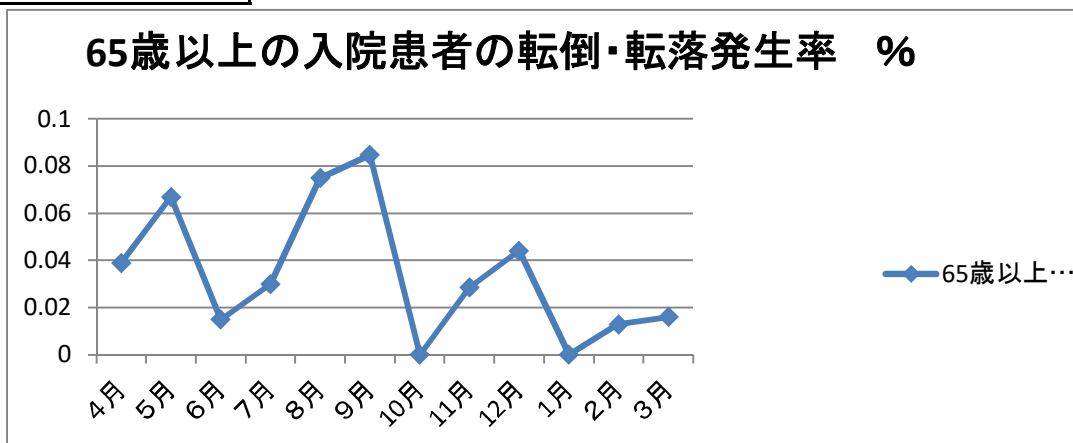
入院患者の高齢化に伴い、65歳以上の転倒・転落が8割以上をしめ増加している傾向にある。また、整形外科を主科とするA7病棟の特徴として、骨粗鬆症により、骨が脆弱な患者も多く、転倒による新規骨折が発生しやすいといえる。そして、手術を目的に入院する患者のうち、高齢者は術後せん妄を起こすことで、転倒・転落の発生リスクが高まることも、特徴的である。せぼね科患者は、四肢のしびれや麻痺をとめない、機能低下を来している患者も多いため、転倒・転落リスクは高い。術後に、歩行器、車いす、松葉杖など、補助具を使用している患者も多く、補助具使用中の転倒も発生しているのが特徴と考える。転倒・転落による新規骨折や外傷は、入院期間の延長やリハビリの遅延につながり、早期退院を目指すことが出来ないため、転倒・転落発生率の低下を目指す必要がある。

データの定義

分子: 65歳以上の入院延べ患者数(せぼね科、スポーツ整形外科、足の外科)

分母: 入院中に転倒・転落した65歳以上の患者(せぼね科、スポーツ整形外科、足の外科)

2018年度のデータ



参考データ

2017年度、A7病棟入院患者のうち65歳以上786名中、65歳以上の転倒転落件数は33件であった。65歳以上の転倒転落率は4.8%であった。

評価

2017年度、65歳以上の転倒転落件数は33件、転倒転落率は4.8%であった。2018年度、65歳以上の転倒転落件数は25件、転倒転落率は3.4%であり発生数、発生率ともに低下した。排泄洗面時の転倒により緊急手術となった骨折の事例が1例あった。2018年度A7病棟は、75歳以上の後期高齢者の手術件数、入院患者が増加している現状がある。転倒転落事例の分析の結果、手術後7病日以降の転倒が70%を占めている。手術翌日より離床、リハビリを開始することで患者の自立心が徐々に高まり、患者自身が認識する身体能力とリハビリで行動できる身体能力とのギャップが生じ、転倒につながったと分析した。車いすや歩行補助具を使用した患者が多く、ベッドサイドでの日常生活動作に基づいたアセスメントをリハビリと情報共有を行い動作確認を看護師が行い理学療法士、および患者と情報共有し転倒転落予防に努める対策を患者指導に活かし実践することが今後の課題である。

後期高齢者の胸腰椎圧迫骨折後の手術症例の増加に伴い、離床センサーを使用している認知症の合併している患者多く、転倒転落予防対策の介入が必要な患者が増加している。カンファレンスや朝の申し送りの際に転倒のリスクのある患者の情報共有をおこない患者参画看護計画の立案や統一した転倒予防介入を行い患者の個別性に合わせた対策の実践を検討していく。

参考文献

参考文献: 翻訳 高齢者の転倒予防ガイドライン, メジカルビュー社2012; 7: 140-153